

# 絶え間なく変化し続ける人と森の関係

## —ゲラの森の生態史—

伊藤 義将

### ◆はじめに — エチオピアの森

エチオピア南西部には、首都アジスアベバや北部の観光地周辺では決して見ることのできない、樹高の高い広葉樹の深い森がある。この森はエチオピア南部を縦断しケニアのトゥルカナ湖に注ぎ込むオモ川の水源林という役割を果たしている。

現在エチオピアに残された森林は全国土のわずかに4.2%にあたる459万ヘクタールである（FAO 2005）。エチオピアに残る多くの森林は、熱帯地域の標高1500メートル以上の高地に分布している。そのため、中央アフリカに広く分布する低地の熱帯雨林と比較して、エチオピアの熱帯高地林は一度切り拓かれてしまうと再生に多大な時間を必要とする。1998年、当時のエチオピア暫定政府は、熱帯高地林がひろがる南西部の一部を「ベレテ・ゲラ森林保護区域」に指定した（エチオピア国オロミア州政府・国際協力事業団 2003）（図1）。

### ◆ゲラ行政区の森

ベレテ・ゲラ森林保護区域周辺は12世紀ごろにはオモ系のカファ人によってカファ王国が建国され、16世紀ごろからはクシ系のオロモ人によって五つの王国が築かれた。そのうちのひとつであったゲラ王国が築かれたのは、現在のベレテ・ゲラ森林保護区に含まれるゲラ行政区であった。現在この地域にはオロモ人とカファ人に起源を持つ人々が生活している。

アメリカ人の歴史学者マッキーン（J. C. McCann）は、イタリア人宣教師や探検家が残した文献資料と聞き取り調査をもとに、19世紀から20世紀に起こったゲラの森の変遷を描いている。

19世紀中期、ゲラ行政区南部のアファロ村には人口が集中しており、人々は森林を耕作地に変え

てきた。しかし、北部アムハラ人が1881年に侵攻してくると、これまでゲラ行政区に暮らしていた人々はほかの土地へと逃げ出し、彼らが切り拓いた畑は再び森林に覆われた（McCann 1995）。

1928年、イタリア人冒険家チェルリは、19世紀後半にアファロ村で活動していたイタリア人宣教師の足跡を辿り、彼の墓やミッシヨナリー・ステーションが硬木の深い森に飲み込まれ、集落の面影さえなくなっていることを嘆いている。1991年に同じ場所を訪れたマッキーンもまた、ミッシヨナリー・ステーションは深い森のなかにあり、数人の長老が当時家屋のあった場所を記憶しているにすぎないと報告している（McCann 1995）。

ゲラ行政区南部でコーヒー栽培がさかんになるのは第一次大戦後の1930年代になってからである。市場でコーヒーの価格が上昇したこと、森林の土壌が酸性かつ窒素分が豊富でコーヒーの栽培に適していたこと、森林であった土地は誰もが利用可能だったことなどが影響し、人々は森林をコーヒー栽培地へと急速に変化させていった

（McCann 1995）。

このようにゲラ行政区の森の変遷をみていくと、



図1 ベレテ・ゲラ森林保護区域の位置

人々と森林の関係はその時代背景によってさまざまな形に変化してきたと言える。

#### ◆セイチャ村の人々と隣接する原生林

ゲラ行政区北西部のセイチャ村に住む人々はコムギ、オオムギ、ソラマメ、エンドウマメといった穀物を栽培しながら少数の家畜を飼育している。セイチャ村の人々の多くは以前ゲラ行政区南部の村々で生活していたが、約半世紀前にセイチャ村を含むゲラ行政区北西部に移住してきた。

セイチャ村は標高2100メートルから2900メートルと非常に起伏に富んだ地域であり、植生も多様である。人々は、東西に約7キロメートル、南北に5キロメートルの地域に散住している(写真)。村の南側には、隣接する原生林と村域を隔てるようにゴッジョ川が流れている(図2)。

セイチャ村の住人が隣接する原生林からどのような森林資源を利用しているかという関心のもと、2005年に彼らの植物利用に関する調査を行い、114種の有用植物を確認することができた。5名のインフォーマントからの聞き取り調査によれば、これら有用植物のうち道具などの物質文化に利用される植物が36%、薬用植物が19%、食用植物が11%、儀礼に利用される植物が3%、養蜂箱をかける木、ハチミツの蜜源など間接的に利用される植物が31%であった(複数回答を含む)。

聞き取り調査と観察から、これら有用植物の生育場所を調査すると、道端36%、森林22%、畑18%、家の敷地12%、川5%、広場4%、湿地3%という結果になった。しかし、有用植物のなかで、人々が日常的に利用する植物を観察すると、道端、畑、家の敷地といった身近な場所から植物を採集することが多かった。例えば、七つの世帯が1週



セイチャ村の景観。村の南部には原生林が広がる。

間のあいだに利用した薪は、道端や家の敷地、畑を囲む柵などから採集され、村に隣接する原生林から採集されることはまったくなかった。これに加えて、セイチャ村の人々は頻繁に利用する薬草を庭畑で栽培していて、村内には生育していない薬草を村外で見つけると、それを持ち帰り自宅の庭に植えることも頻繁に行っていた。

セイチャ村に暮らす人々の日常的な植物利用を観察する限り、彼らは隣接する原生林から植物を採集することは非常に少なく、家の敷地内で栽培したり、庭畑や道端といった身近な場所に生育する植物を頻繁に利用していた。

人々の植物利用を調査した結果と私がセイチャ村に滞在したときの経験から、セイチャ村の人々は積極的には森に入らずに「森とは一線をひいて」生活しているという印象をうけた。たとえば、私が「森に調査に出かける」と村の人びとに告げるたびに、彼らは「森にはライオンが住んでいて食べられてしまう」、「ジンニ(精霊)がいて、出会うと病気になってしまう」といって、私が森に入るのを止めようとした。それでも私が強引に森に向かおうとすると、インフォーマントの多くは仕方なしについてきてくれたが、ゴッジョ川までやってくると「ここから先には行けないな」と言って、引き返そうとすることがほとんどであった。

また、1950年代後半から60年代にかけて撮影された航空写真を見ると、現在セイチャ村の人々が住んでいる地域は森林に覆われていて、40歳代の男性は「ここに来たときは、ほとんどが森林に覆われていて、木以外何もなかった。しかし、俺がこの森を切り拓いて畑にした」と自慢気に語った。彼らは、森林は恐ろしい力やモノが宿るところだと語る。そして、畑を切り拓くときには、森に闘いを挑むように伐採作業に臨んできたのである。

しかし、セイチャ村に住む人々のなかにはゲラ

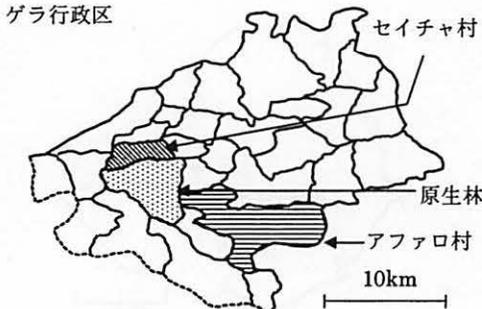


図2 ゲラ行政区地図

行政区南部の森に出かけていき野生種のコーヒー、ハチミツ、カルダモンなどの収穫を行う人々がいる。セイチャ村に住む人々は、隣接する原生林から森林資源を採集して利用することは非常に稀であるが、ゲラ行政区南部の森をコーヒーやハチミツ、カルダモンの栽培地として利用しているのである。

#### ◆コーヒーの野生種が茂る南部の森

ゲラ行政区南部の村々は、標高約 1600 メートルに位置し、村の周辺にはコーヒーの野生種が生い茂っている。私は 2005 年の雨季に、予備調査のためセイチャ村に 3 カ月ほど滞在した。このときに、セイチャ村に暮らす少年に植物採集など調査の手伝いをしてもらった。その後、首都アジスアベバに戻り、乾季に再びセイチャ村を訪れ、手伝いをしてくれた少年の家を訪ねると、12 人いる兄弟姉妹のうち、彼の姉妹と幼い弟しかいなかった。彼の親戚の女性によれば、私の手伝いをしてくれた少年は「グラに行っている」とのことだった。グラとは、ゲラ行政区南部のアファロ村にある集落のひとつである。彼女は、幼い弟を除いた男性は、1 週間ほどグラに滞在しながらコーヒーの収穫を行っている」と答えた。

セイチャ村の人々のなかには乾季が始まると子供を連れてコーヒーの森へ出かける人々がいる。その際彼らは、セイチャ村から食料を携え、コーヒーの森の中に簡易小屋を建てて寝泊りをする。1 週間ほど収穫作業を行った後、ゲラ行政区の中心地の町へ収穫したコーヒーを運び売却する。人々は、その売り上げで洋服やトタン板などの工業製品を購入する。

コーヒーの森では、コーヒー以外にカルダモンが栽培されていたり、数多くの養蜂箱が木の上に仕かけられている。人々は、乾季のコーヒー収穫以外にも、6 月から 8 月の雨季にかけてはハチミツの収穫を行うためにゲラ行政区南部の森に出かける。彼らにとってゲラ行政区南部の森は、コーヒー、ハチミツ、カルダモンなどの換金作物を栽培する重要な場所である。

#### ◆まとめ

現在、ゲラ行政区南部のアファロ村では JICA による住民参加型の森林管理計画が行われている。

地域住民と行政の間で森林利用に関する仮契約が結ばれ、地域住民の手によってどのように森林が管理されるべきなのか、どのような「きまり」のもとで森林が利用されるべきなのか、議論が重ねられている最中である。

しかし、これまで見てきたようにセイチャ村に住む人々は、ゲラ行政区北西部の森と南部の森に対しては、それぞれ異なるかかわり方をしている。北西部の森は農耕地として過去 50 年の間に切り拓かれてしまい、現存する原生林には人々はほとんど立ち入ることがない。その一方で人々は、コーヒーの野生種が茂る南部の森は積極的に利用し、さらにはコーヒーの木と一緒に庇陰樹を植えて、南部の森林景観をつくりだしている (JICA 2005)。ゲラ行政区における人々と森林との関係はあるひとつの側面から見ただけでは説明することはできない。特に標高 1600 メートルから 2900 メートルという起伏の激しいゲラ行政区ではあらゆる場所で人々が異なる関係を森林と築いていると考えることができる。

自然保護のモデルを模索する際、人間と自然との相互作用に注目した地域の生態史についての理解が不可欠である (市川 1992 : 119)。ゲラの森においても、これまで築かれてきた人と森との相互作用の変遷史としてのゲラの森の生態史をふまえながら、今後「開発」や「保全」活動をすすめていく必要があるだろう。筆者もまた、セイチャ村に暮らす人々の生業活動やゲラの森やその周辺地域における人々の移動の歴史をふまえながら、南部と北西部の森への関わり方のちがいが生じる背景を検討し、ゲラの森の生態史をより多面的に描きだしていきたいと考えている。

#### 〈参考文献〉

- エチオピア国オロミア州政府・国際協力事業団 2003 『エチオピア連邦共和国ベレテ・ゲラ参加型森林管理計画』。
- FAO 2005 *Global Forest Resource Assessment*.
- 市川光雄 1992 「アフリカ狩猟採集民の森林利用における多様性と多重性」(『Tropics』Vol.2(2) 107-121)。
- JICA 2005 *Key Characteristics of Forests and Livelihood: Basic Understanding for Stakeholder Analysis*.
- McCann, James C. 1995 *People of the Plow: An Agricultural History of Ethiopia, 1800-1900*, Madison; University of Wisconsin Press.

(いとう・よしまさ/京都大学)